

若狭小浜の寺社における経済活動としての八百比丘尼伝説の利用

—小浜発八百比丘尼伝説の各地への伝播とその影響について—

富 樫 晃

はじめに

これまで発表した論文等において、八百比丘尼伝説の成立と伝播をめぐって、若狭小浜という地が、この伝説の重要な要素となつているという点において注目してきた。その中で、江戸初期から中期にかけ若狭小浜「空印寺」及び「神明宮」は、小浜藩主酒井氏との特別の関係を有し、その藩主の威光に基づく寺社格式の保持が必要であったが、それまで藩に支えられていた増築や改修等が、小浜藩の財政逼迫により困難となった。そのため、格式保持の勧進活動を目的として八百比丘尼伝説を利用し、伝説の遺構整備や新たな縁起を一七世紀後半から一八世紀半ばに作成したことを論考した。

その論考において「空印寺」と「神明宮」の各地での勧進活動とそれに伴う伝説の伝播について、両者を同一視してきたが、勧進方法を詳細に検討してみると両者に相違があり、それが各

地の伝承に影響を与えていることがわかってきた。主に北陸、関東において、「空印寺」が各地に拠点を設け、拠点を八百比丘尼生家として権威付けを行い、八百比丘尼が入定した地である「空印寺」に拠点からの聖地巡礼を誘ったのに対し、「神明宮」が新たに八百比丘尼像を作成し、各地で開帳を行い、略縁起等の販売を行った。この結果、各地に「空印寺」から伝播された伝説は、八百比丘尼生家の伝承として残り、「神明宮」の略縁起は各地の寺院等に影響を与え、各地の寺院独自の八百比丘尼伝承として発展したことについて、具体例と共に論考していく。

一．小浜における中世期から近世初期にかけての寺社
勧進活動の実態

(一) 中世期(一五世紀) 初期から中期にかけて

小浜から各地、特に京都の様な大都市における寺社の勧進活動は、宝徳元年(一四四九)の各種日記類に記録されているよ

うに、中世期から行われていた。『中原康富記』に「古老云、往年所聞く之白比丘尼也云々」とあるように、この日記類に記録された以前から長寿比丘尼の噂が広がっていたことを示している。この十五世紀初期から中期にかけ、小浜の羽賀寺が、幾度か伽藍を焼失し、永享八年（一四三六）奥州十三湊の安倍（安藤）氏からの寄進で再建されるなど、小浜の寺社が焼失もしくは老朽化した伽藍の修理のため、各方面に出した寄進の要請により、複数の比丘尼集団が京都や各地に向いて寺院に逗留しつつ勧進を行っていたと考えられる。その過程において、長寿比丘尼を自称する勧進集団から各地に若狭の長寿比丘尼の噂が伝播されたと考えられる。ただし、人魚の肉を食して長寿となったというストーリーが、そのときに伝えられていたかどうかは不明であるが、若耶群談によると「尼嘗語人曰、我面見源平盛衰、又見源義經供爲修験僧形、過此地赴東奥」とあるように、長寿の証明として義経の東奥へ落ち延びる様など源平の昔を語っていた。

（二）中世末期（十六世紀）から近世初期（十七世紀）にかけて

宝徳元年（一四四九）の記録以降、中世末期まで小浜からの勧進比丘尼等の記録は途絶えている。

応仁の乱以降の戦乱期において、京都を始め、各国を安全かつ自由に勧進ができる環境になかったことが原因の一端にあっ

たと考えられる。戦乱が収まりつつあった一六世紀末の頃には、林羅山『本庁神社考』³に記載があるのとおり、八百比丘尼伝承の定番である人魚の肉を食して、長寿となった小浜の白比丘尼のストーリーが成立している。林羅山は、この話を聞いた幼少の頃は京都に在住しており、京都でこの話が広く伝えられていたと考えられ、この頃には小浜から大都市であった京都や各地に向け、人魚の肉によって長寿となったとされる比丘尼による勧進が再開されたと想像されるのである。また、小浜から来た長寿の比丘尼が、各地の植樹や在住の伝承として残っているのも、この頃の活動履歴ではないかと考えられる。ただし、近世に入ってから、こうした実際に長寿を名乗り、勧進活動を行っていた集団の活動が下火となってくる。その原因として、江戸幕府が「修験道法度」等により、こうした勧進活動の中心であった修験者等、廻国宗教者の定住化政策を打ち出し、廻国が困難となったためと思われる。

二．新興勢力「空印寺」、「神明宮」の勧進活動開始による八百比丘尼伝承利用の戦略

（一）「空印寺」、「神明宮」の勧進活動への参画事情

拙稿「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」⁴において、若狭小浜の「空印寺」及び「神明宮」は、小浜藩主酒井氏との特別の関係を有し、その藩主の威光に

基づく寺社格式の保持が必要であった。しかしそれまで藩に支えられていた増築や改修等が、小浜藩の財政逼迫により困難となった。そのため、格式保持目的の勸進活動に八百比丘尼伝説を利用し、伝説の遺構整備や新たな縁起を一七世紀後半から一八世紀半ばかけて作成したとの論考を行った。

また、湯浅隆「江戸の開帳における十八世紀後半の変化」⁵⁾では、「寺社の堂舎修復費用の調達にかんし、従来は幕府が負担していた費用の支出を民衆の信仰に転嫁するという政策は、享保期にいっせいに始まっていた。(中略)これらの諸政策は、元禄期にみられたような民衆の仏教信仰への高揚した機運、それに基づく零細ではあるが広範な喜捨行為の存在を前提として、初めて可能であった。」と、享保期(一七一六年～一七三五年)において、江戸幕府が寺社全般に対し堂舎修復の自助努力要請の方針を明確に打ち出したと指摘している。この時期、幕府や各藩の財政不安と民衆文化の発達が、各地の寺社の経営を公費頼みから勸進や開帳といった独自の経済活動に転換していった流れの中に、「空印寺」、「神明宮」も含まれていたといえよう。

近世初期以前の、長寿をかたる比丘尼を中心とした小規模集団の各地への勸進活動から、寛永十一年(一六三四)に入封した藩主酒井氏の後見を受けた新興勢力である「空印寺」、「神明宮」は、こうした時代の流れを受け、独自の戦略に基づく勸進活動が始められたと考えられるのである。

(二) 空印寺の勸進活動における戦略

『拾権雑話』⁶⁾には、「八百比丘尼石塔の事は、五世良白和尚の夢に老尼来り、我菩提すくなし、頼よしを云、既に三度に及ぶ。是によつて初て比丘尼の墓を築、当今三界万霊の墓の所にあり、開山の墓と相並へり。然る処廻国巡礼とも参詣し是を見て夫婦墓にて候やと尋問もの多し。此故に比丘尼の墓を岩窟へ引て今の如しと云。此墓寛文中の事にして古跡にあらず。」と寛文年間である一六六〇年代に空印寺が行った八百比丘尼遺構整備の内情が書かれている。更に『拾権雑話』筆者の木崎揚窓が幼少だった一七〇〇年頃に、八十六歳の老僧から聞いた話としていえることから、信憑性の高い話であることがわかる。

それまでの伝承、文献の多くが八百比丘尼の生死は明らかではなかったことに対し、この時初めて空印寺が八百比丘尼の死亡を認め、岩窟に墓を作り、ここを死没地としたのである。こうした八百比丘尼遺構整備の目的は、空印寺「八百比丘尼略縁起」⁸⁾において明確に示されている。

「御齡い八百歳にして当寺境内後瀬山麓の大巖くつへ入定為し給う、時人名づけて八百比丘尼または八百姫とも寿長の尼とも、又椿を特に愛し入定し給うゆえ玉椿の尼とも申し奉れり。御入定後祈願する者あれば必ず不思議の靈験あり、依つて往昔より都鄙遠近老若男女この靈地に参詣し、福德寿命を願ひ諸病平癒を祈り、その靈助を蒙る者が多きが為、五百十余年の昔より昔より今に至るまで参信祈願の絶ゆることなし。それ生まれなが

らに智徳萬人に勝る、これ聖なり、神なり、仏なり、八百歳の寿命を保つ、是素より凡人に非らず、靈驗何ぞ疑わんや。薄福小徳の輩、宿業の爲諸病医薬の効験なくば早く靈地に來り冥助を祈るべし。」

すなわち、八百比丘尼が入定した岩窟を聖地とし、そこに參詣すれば長寿が得られ、病氣も快癒するといった靈驗あらたかな靈地として宣伝することである。これにより、近隣のみでなく、広く各地から多くの參詣客が空印寺を訪れ、寄進していただくことを目論んだものといえよう。

(三) 神明宮の勸進活動における戦略

空印寺と同じく、『拾権雜話』に神明宮の新たな勸進活動についての記述がある。

〔前略〕寛文の頃より比丘尼の像を山上に仮殿をしつらひ収め置、白山の祠は今に残れり、古来より有所の像は八尺五分斗。元文五年に改め作るは壹尺四寸也。此時初て縁起を作る。宝曆九年京都にて開帳あり、比丘尼は僧形故社家は是を忌て八百姫と称す」

これは、元文五年（一七四〇）に藩主酒井氏の紋を入れた新たな八百比丘尼像を作成し、開帳用に新たに縁起を作成したことが記されている。

もともと神明宮は、神主である菊池氏が、藩主酒井氏の入封前から八百比丘尼伝承を利用していたことが、『若狭国守護代

記』に記載されており、『拾権雜話』に「古来より有所の像は八尺五分斗」とある室町時代に制作された初代の八百比丘尼像が現存している。同じ『拾権雜話』に「巡礼回国の者開帳を望む毎に居宅よりは是迄上がり下り大儀故、山に假殿を立、入置候。白椿の社に白椿を空印様植えさせられ候由申伝候。」とあるとおり、初代八百比丘尼像は、廻国の宗教者の希望により、その都度開帳していた地元限定での小規模な勸進方法であり、新たな像の作成は、全国規模での出開帳と略縁起販売による収益確保を目指したものといえよう。

(四) 空印寺と神明宮による勸進方法の摺り合わせ

空印寺と神明宮が勸進を全国展開するにあたり、その縁起内容や勸進方法についての摺り合わせを行った形跡が認められる。

これは両者がそれぞれ勝手に狭い限られたエリア¹⁰での勸進を行った結果、共倒れになることを避けるためには必然だったといえる。最初に行ったのが、各自の八百比丘尼縁起内容の摺り合わせであったことは、表1.「空印寺・神明宮縁起一覧」1.「空印寺縁起」と2.「神明宮署縁起」の内容が、一部相違点（八百比丘尼の生年等）はあるにしても、ほぼ同一内容であると共に、八百比丘尼が長年居住した場所が神明宮であり、死没したところが空印寺（又は後瀬山）の岩窟として、お互いに気を遣う内容となっていることから理解できる。また勸進方法について、空印寺が、各地からの參詣客を集めるため、各地の

集落で草分けとされる有力な家を拠点として、周辺地域から空印寺の参詣を誘う方法を採用したのに対し、神明宮は新しい八百比丘尼像を、各地の八百比丘尼の伝承等がある寺院を借りて開帳、略縁起等の販売を行う方法といった、違う勧進方法を採用することで、狭いテリトリー内での勧進活動において、摩擦が起きないように棲み分けを図ったものと考えられる。

三、空印寺と神明宮による勧進の各地への展開

(一) 空印寺の各地へ勧進実態と八百比丘尼伝承の利用

空印寺が上記事情によって、新たに各地への勧進活動を開始するにあたり、以下の点が課題となったであろう。

- ・各地における活動拠点の確保。
- ・確保した活動拠点において、どのようにして拠点地域の住民を小浜空印寺に参詣させるか。

まず、各地の活動拠点の確保については、中世末期から近世初期に小浜から各地に長寿の比丘尼による勧進活動が再開されたことにより、小規模な長寿を名乗る、後に八百比丘尼に比定される比丘尼の一団が、新潟から関東、または富山から熊野・伊勢ルート上に植樹や居住といった痕跡となる伝承を残しているが、この時の各地の勧進宿を再利用したと思われる。

空印寺で入定した八百比丘尼の生家とされる佐渡羽茂の藤井(田家)家の伝承として、「比丘尼妙道ハ何国之産、何年間之生年共不知、往年藤井甚太郎ニ仮住居諸国ヲ遍曆シ、佐渡江帰住之時甚太郎六代之孫ニ対面スト傳説アリ。此故ニ、是ヲ郷里之人今ニ八百比丘ト唱フ」とあるとおり、勧進比丘尼が中世期より長期間利用していた地方の有力な家を、そのまま空印寺が利用したと思われる事例もある。また、一度故郷を出てから年数を経て故郷に戻ってくるといった伝承も複数あることなどから、各地で同様なことが行われていたと考えられる。

このようにして、各地に活動拠点を確保した後、その地域の住民をどのようにして、空印寺に参詣させることができるのかを、空印寺側ではかなり知恵を絞ったに違いない。すでに新たに作成した縁起により、八百比丘尼は死没したこととされ、死没地の遺構整備を行った以上、これまでの勧進方法のように、若狭から訪問した長寿の比丘尼が昔を語るやり方はできない。そこで、活動拠点とした地元の草分け的な家の先祖を八百比丘尼とし、現在の家をその子孫とすることを考えたのであろう。その際に、すでに廃れている八百比丘尼長寿の証明である源平合戦を語るやり方を変えて、活動拠点の地元につながる古い伝説等と自らの縁起を組み合わせたストーリーを作り上げ、活動拠点地域の先祖たる八百比丘尼の長寿の証明としたのではないか。ただし、空印寺としては、自らの縁起で八百比丘尼の出自を小浜の高橋長者としていたのを無視するものであり、江戸期の略

縁起が現存していない¹³のは、こうした事情により、あまり表面に略縁起の販売等を控えたためではないか。

こうして作り上げられた、各地の活動拠点に対して、空印寺から八百比丘尼の遺物等の贈与¹⁴などを積極的に行い、その家が八百比丘尼の子孫であることの信憑性を高め、権威付けが行われたのである。その結果、八百比丘尼の出自が地域住民の土地であることから、いわゆる「おらが村」的な共同体意識が発生し、先祖の死没した土地として、空印寺詣でを促進したのではないかと考えられる。以下の事例から各地から多くの人が小浜空印寺に足を運んでいたことがわかり、空印寺の戦略は概ね成功したといえるのではないか。

・『拾稚雑話』八百比丘尼を会津出身とする記述

・『佐渡國史』若狭彦神社宮司談として若狭にも八百比丘尼が佐渡の人であるとの伝えがある。

・『利根郡誌』若狭空印寺に八百姫神社の碑には、八百比丘尼の故国として上毛利根郡小川本邸産而農民清治者女也と記されている。

・『西頸城郡の伝説』糸魚川では若狭に「越後国布川在早川者」と記した八百比丘尼の石碑があるとされる。

ただし、こうした周辺地域のみで、江戸市中、現在の東京中心部に八百比丘尼の子孫を名乗る家の伝承がないのは、江戸が

外部から流入してきた都市民で構成されていることから、共同体意識が希薄だったために根付かなかったと思われる。

(二) 神明宮の各地へ勧進実態と八百比丘尼伝承の利用

神明宮が、それまで廻国の宗教者相手に、地元限定での小規模な居開帳という勧進方法から、新たに権威付けとして藩主酒井氏の紋を入れた八百比丘尼像を作成し、全国展開する出開帳に方針を改めたことにより、課題となったことは、この出開帳を受け入れてくれる各地の寺院等の確保であつたらう。

『拾稚雑話』において、元文五年（一七四〇）に像を作成して、十九年後の宝暦九年（一七五九）京都にて開帳したことが記されているが、拙稿¹⁵において、神明宮が京都での開帳以前に、東日本地域の寺院において八百比丘尼像の開帳と略縁起販売を行っていたのではないかと考察を行った。この中で取り上げた寺院の一つ、福島県喜多方市塩川町「金川寺」では、若狭から来た老尼がこの寺を開いたとする伝承があり、当初、この金川寺のように若狭及び八百比丘尼との縁のある寺院等と接触し、出開帳の場を依頼したのではないかと考えられる。京都以前に東日本地域において出開帳が行われたことは、神明宮と金川寺の八百比丘尼略縁起の近似性、西方町真名子「八百比丘尼堂」の略縁起での「自ら御姿を作らせ給い、一体は即ち真名子の里に送り、一体は若狭に留め給い」といった、神明宮出開帳の八百比丘尼像をコピーしたことを暗に思わせる記述、さいたま

市慈眼寺に現存する京都開帳以前の略縁起などから推察できる。

神明宮からの出開帳場所提供依頼を受けた各寺院では、場所提供による収入などと共に、開帳のノウハウを学ぶ機会でもあり、また小浜という八百比丘尼伝説の聖地からの来訪者は、自らの威厳を高めるためにも非常に有益だったろう。故にこれら場所を提供したいくつかの寺院では、神明宮の出開帳を引き受けた後、学んだノウハウを基に、自ら八百比丘尼像や遺物の作成や、神明宮縁起を参考とし、小浜ブランドによる威光を取り入れた縁起制作を行い、開帳による勧進を進めていったと見られる。

四・空印寺と神明宮の勧進活動による八百比丘尼伝承の変容

(一) 空印寺による新たな八百比丘尼伝説の創作

空印寺の各地への勧進活動において、積極的に小浜空印寺に参詣客を呼び込もうとする戦略により、従来の八百比丘尼伝説の内容を大幅に改変し、新たな内容を創作する必要性に迫られた。それは、具体的に以下の内容を盛り込むことであった。

- ・八百比丘尼はすでに死没しており、その死没地は小浜空印寺の岩窟であること。
- ・各地にある勧進の拠点となる地方の有力な家を権威付けす

るために、その家の先祖を八百比丘尼であると見、生まれもその地とすること。

・八百比丘尼長寿の証明と共に、共同体意識を強めるため、各地の拠点近くの歴史、伝説をストーリーに盛り込むこと。

空印寺では、すでに死没地が自らの境内の岩窟であるという新たな縁起を制作していたが、上記の内容を盛り込むため、八百比丘尼の生地等、一部ストーリーを拠点の地元に合わせて改変を行い、各拠点において、空印寺に現存する「八百比丘尼伝説由来画」のようなものを使って、八百比丘尼の霊験について絵解きを行ったのであろう。その結果、表2. で空印寺が関係したと思われる伝承事例に挙げたように、各地の名家に生まれた娘が、人魚の肉を食べ長生し、諸国巡礼の旅に出て、最後は若狭（空印寺）で最期を遂げるという一貫したストーリーが各地に残されたと考え得るのである。

(二) 神明宮の八百比丘尼略縁起の変容と各地への影響

神明宮が元文五年（一七四〇）に、新たな八百比丘尼像と縁起を作成し、これまでの小規模な居開帳から、全国各地への出開帳に方針変更したことは、すでに触れたが、その際に作った略縁起が、出開帳を各地に進めていくうちに不都合な部分や追加すべき部分が出てきたのであろう。表1. の事例2と3の神明宮八百比丘尼略縁起には一三年の間があるが、事例2では、

八百比丘尼の出自を地元若狭の高橋長者としており、ストーリーに一貫性があるが、事例3¹⁷では、出自が秦の通鴻の他、数々の異説も盛り込んでおり、ストーリーに一貫性がないなど、内容が微妙に変化している。この間の縁起が改変された事情として、八百比丘尼の生家が、若狭の高橋長者では全国的な知名度に劣り、不老長寿の常世信仰や庚申信仰において有名であった婦人系譜の秦一族を取り上げたのではないか。また、若狭の地誌『若耶群談』等の各種内容を盛り込み、諸説を取り入れたのは、この縁起が神明宮一社のみならず、小浜全体に広く伝わっていることを示したかったのであろうか。縁起作成当初、空印寺と摺り合わせを行っていたものが、空印寺側の事情によって、高橋長者という出自を無視する方向性になったことで、神明宮側でも出自にこだわる必要性が薄れたということかもしれない。

前稿で考察したとおり、東日本地域の寺院を中心として、事例3の神明宮縁起の影響を受け、自らの開帳用の略縁起を作成した痕跡¹⁷が残っており、また表3に示したとおり、各地の寺社に多くの八百比丘尼伝承が残っている。これら寺社にも神明宮の開帳による縁起や像の作成等に影響が残っているものもあるのではないだろうか。

五. 小浜

若狭小浜では、中世期から近世初期にかけ、白比丘尼等の長

寿を名乗る小集団が、京都を始め各地で勧進や寺社開基、橋造営や植樹などの土地のインフラ整備を行ってきたことが、当時の記録や伝承などでその活動の一端をうかがい知ることができ。しかし、時代の流れと共にそうした集団が廃れていった頃、十八世紀初頭に藩主と特別な関係にあることから、格式保持のため収入源を得たかった新興勢力として、「空印寺」と「神明宮」が浮かび上がってきた。この両者は縁起にお互い矛盾点が生じないこと、またお互いが勧進において干渉することが無いよう綿密に摺り合わせを行い、異なる勧進方法を取ってきたと考えられる。そして、それぞれの戦略に伴う勧進方法を進めていくうちに、実態に適合できるよう利用していた八百比丘尼伝承に基づく縁起内容等の見直しが行われた。それが現在各地に残る八百比丘尼伝説の基本となったといえよう。しかし、これまでも同じ小浜の宗教者という括りで、両者が同一視されることが多かったが、詳細を見ていくと、異なる勧進活動を行ってきた両者による、八百比丘尼伝承内容の変遷はそれぞれ各自の事情により異なるものだったといえるのではないかと。

- (1) 宝徳元年(一四四九)『中原康富記』五月二十六日の条、『唐橋綱光卿記』六月八日の条、『臥雲日件録』抜尤 七月二十六日の条
- (2) 千賀源右衛門『若耶群談』寛文年間(一六六一)～一六七三)
- (3) 林羅山『本朝神社考』卷六 都良香の条「余が先考嘗て語つて曰く、伝へ聞く、若狭国に白比丘尼と号する者あり。其の父一旦山に入り異人に遇ふ。与に俱に一處に到る。殆ど二天地にして別世界なり。其の人一物を与へて曰く、是れ人魚なり。之を食ふときは年を延べ老はずと。父携えて家に帰る。其の女子迎へ飲んで衣帯を取る。因て人魚を袖に得て、乃ち之を食ふ。女子寿四百余歳、所謂白比丘尼是れなり。余幼齡にしてこの事を聞いて忘れず」
- (4) 富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」『口承文芸研究』第四十三号 日本口承文芸学会 二〇二〇年
- (5) 湯浅隆「江戸の開帳における十八世紀後半の変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』三三三号 一九九一年 国立歴史民俗博物館
- (6) 木崎惕窓『拾雅雑話』明和元年(一七六四)
- (7) 「石石塔の事、西小川浦常福地雪庭八十六歳の時物かたりに、我小僧たりし時にて、まのあたり覚たるよし、但右比丘尼石塔也。」
- (8) 空印寺「八百比丘尼略縁起」年代不明 現存本 明治四二(一九〇九)年発行
- (9) 卷五「元和五年(一六一九)未、今年小浜の西、青井白玉椿に小社をはじめて建立す。是れ即ち同所神明の神主菊池某が計ひなり。是は、去る頃より比丘尼の形を現して舞遊び、人にゆきあいては、かき消すように失ぬ。この所は昔、八百比丘尼の住跡なれば定めてその靈魂にてあるべしとて小社を建て、八百比丘尼の宮と名付く。それより怪しきものは夜も出ずという。今は歯瘡の宮と世人申して、歯の痛むに願を掛けば、癒と云々」
- (10) 小浜発八百比丘尼伝説の伝承圏から見ると、中世期から各地での勧進を行う集団のテリトリーが暗黙のうちに決められていた可能性がある。例えば八百比丘尼伝説は福島県会津地方から新潟県中部までが伝承の北限であるが、それ以北の奥州地域では、「名取の老女」譚を持つ比丘尼集団が存在し、また常陸坊海尊等の長寿を名乗り、源平合戦の昔を語って勧進を行っていた山伏と思われる集団が活動していた。また比丘尼伝承圏から外れる山陰以西や大都市を抱えていた畿内といった地域にも、各種勧進集団との棲み分けがされていたとも考えられるのである。そのため、小浜の勧進集団のテリトリーは北陸・新潟から関東方面と伊勢、熊野を結ぶラインに限定されていた結果が八百比丘尼伝承圏となったのではないだろうか。
- (11) 富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」
- (12) 表2、No.6、7 大野積では地元で信仰される弥彦明神、No.8、9 佐渡羽茂では日本書紀に記載のある「肅慎の隈」、No.

11、黒部の大津波、No.17、一宮の現地はかつて海だった等その土地の伝承を巧みに取り入れている。

- (13) 現存する空印寺の縁起は、明治四二年に発行された冊子によるものであり、江戸期のものは現存していない。対して、江戸期の神明宮の縁起はさいたま市慈眼寺に残されている。

- (14) 各地の八百比丘尼の生家とされる家には、大野積金五郎家の「八百比丘尼の入定御影」、「九穴の貝」や佐渡田家家の八百比丘尼の法衣（火事で焼失）など八百比丘尼の遺物とされるものが伝承されているケースが多い。

- (15) 「東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立について」『口承文芸研究』第四十四号

- (16) さいたま市慈眼寺では、八百比丘尼由来の寺宝である仏像の縁起を、後に神明宮の縁起で八百比丘尼の来歴等を補っている。

- (17) 表3、事例1～4

参考文献

小浜市史編纂委員会『小浜市史』社寺文書編 一九七六年

小浜市

小浜市史編纂委員会『小浜市史』通史編上巻 一九九二年

小浜市

久野俊彦「縁起のメディア―開帳おける縁起」『寺社縁起

の文化学』二〇〇五年 森話社

富樫晃「八百比丘尼伝説の研究」―佐渡の伝承と「田屋」をめ

ぐって―『口承文芸研究』第三十九号 二〇一六年 日本口承

文芸学会

富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を

中心に―『口承文芸研究』第四十三号 二〇二〇年 日本口承

文芸学会

富樫晃「東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立につい

て」『口承文芸研究』第四十四号 二〇二一年 日本口承文芸学

会

湯浅隆「江戸の開帳における十八世紀後半の変化」『国立歴史民俗

博物館研究報告』三三三号 一九九一年 国立歴史民俗博物館

比留間尚「江戸の開帳」『江戸町人の研究』第二巻 一九七三年

吉川弘文館

(とがし・あきら／昔話伝説研究会)

表 1. 空印寺・神明宮縁起一覧

No.	和暦 西暦	文献	事項
1	年代不明 現存本 明治42 年発行	空印寺「八百 比丘尼略縁起」	そもそも八百比丘尼と申し奉るは、若狭の国祖荒砥の命の末流にして、当国勢村高橋長者の姫御なり。人皇三十七代斉明天皇の御世白雉五年の御誕生にて、膚は白玉の如く容顔美麗にして智徳萬人に勝れさせ給う故に、世人崇めて神仏の再来となす。御齡十六歳の時龍王白髮の翁と現じ人魚の肉を与えらる、姫を食し給うに不思議にや幾百歳を経給うとも二八の容顔更に変わらせ給うことなし、百二十歳にして髪を剃り諸国を巡遊し、此処に五十年彼処に百年と止住せられ、所々堂社を修造し、又道路を開き橋梁を架け、五穀樹木の繁殖を教え、又尊皇奉仏五常の道をも授け給う、依って諸国日躰の在る処は勿論尊崇せり。人皇百一代後花園天皇宝徳元年七月二十六日京都清水の定水庵にて化縁を止め、御生国なる若狭の国へ帰らせ給ひ、後瀬の山中に御神明とて尊き御社ありその傍りにいおりを結び住給ひしが、御齡い八百歳にして当寺境内後瀬山麓の大蔵くつへ入定為し給う、時人名づけて八百比丘尼または八百姫とも寿長の尼とも、又椿を特に愛し入定し給うゆえ玉椿の尼とも申し奉れり。御入定後祈願する者あれば必ず不思議の靈驗あり、依って往昔より都鄙遠近若男若女この靈地に参詣し、福德寿命を願ひ諸病平癒を祈り、その靈助を蒙る者が多きが為、五百余年の昔より昔より今に至るまで参信祈願の絶ゆることなし。それ生まれながらに智徳萬人に勝る、これ聖なり、神なり、仏なり、八百歳の寿命を保つ、是素より凡人に非らず、靈驗何ぞ疑わんや。薄福小徳の輩、宿業の為諸病医薬の効験なくば早く靈地に来り冥助を祈るべし。
2	元文5年 1740	社司 菊池氏 若州神明山 「八百姫宮畧縁 記」	抑八百姫と申奉るハ若狭の国祖荒砥の命の末流にして高橋長者の御姫なり。御生徳容美麗に於して世にたくひなし。人挙婚姻を望ども嫁したまはず。自ら髪をおりし諸国を巡遊し給ふ。只破壊の堂社あれば是を修造し、又通路あしき所には橋をかけ、水亡き所には水をさぐり、木なき所には木を植、人氣あしき所あれば正直順和の道を御示しありて、ここに五十年かここに百年御住所ありし故、諸国に日躰を残し給ふ事多し。中にも東国には久しくまませしとなり。後御生国若狭に帰らせ給ひて、後瀬の山中に天照皇大神宮豊受皇の御宮あり。此所に庵を建てて二宮に使給ふ。椿を好ませ給ひて山に多くつばきを植ゑおき給ふ。則八百姫の御社を玉椿の社と申奉る。姫幾としを縁給へども十八歳の面影にかわらせ給ふことなし。故に其時人名づけて白比丘尼も童の尼とも、亦是長良の尼とも申奉る。御幼少の時人魚を食し給ひ仙術を学せ給ひて、長き齢をたもらせ給ふ末後瀬山のふもとの岩穴に入定し給ひしとなり。人皇四十二代文武天皇の御宇に誕生ましまし隠れ給ひしまでの年数凡八百年に及びしとなり。入稱して八百比丘尼と申奉る。然るに當山は天照皇大神宮の末社に御座ましましゆゑ、福寿圓滿八百姫明神と勸請ありしは往昔より申傳所なり。誠福德寿命の神にて都鄙遠近の人々歩はこぶこと連綿なり。持病難病病身なる人一心をかけ願はば靈驗あらたなる事うたがひなかるべし。當山の総名を後瀬山と云。尤万葉集をはじめ代々の撰集にあまた出たり。又庭訓に若狭の惟といへるは此山の古木の惟の実を云。
3	宝暦3年 1753	若州小浜神明 宮主 菊池肥 後守橋朝臣 「八百比丘尼縁 起」 慈眼寺所蔵 埼玉県さいたま 市大宮の慈 眼寺に現存。	当神明宮末社八百姫の霊廟を訪ぬるに、人皇四十二代文武天皇御宇に、当国に秦の通魂といふ人有、或時友にいざなはれ海辺に至る。友はいく少し目をとじ給へと。語してとず。目をひらけば高妻百文の金闈なり。世に見ざる処の莊嚴なり。各礼儀をわけて饗応甚珍膳なり、主じ繪板を取よ、是魚此所に稀なる物成。何とふ是をすすめん為に招けり。是を食ふもの長生不死なりと。見るに七八歳の人なり。是をあぶりあつと。道満人間成事を怪しみ、くらはずして懐にす。饗応をわけて暇を乞ふ。忽にもとの河辺也。此時は海宮成事を知れり。家に帰り甚酔臥す。時に女子一人有、いつも他へ行帰ればみやげを乞ふ。父臥す枕もとに鼻紙有、ひらけば一物あり。女子食ふ。父醒て尋ぬるに我くらへりという。父のいよく汝長生すべし是竜宮の珍物也。或は云、父山に入る。異人に逢う。ともに一所に行列世界、一もつをあとと。父はくはすて懐に入帰る。女子是を食ふ。又一説に白比丘尼は若狭国小松原の人なり。父有時つりをたる。人魚の形を得たり。是異物成とすつ。女子ひろく食ふと。復一説に若狭国三方郡興道寺村の人、父は天仙と成りて、白椿山のふもとに住と。説々多といども我が家の伝と異り、女子年を経といへとも常に二十斗のごとし。容顔美麗面背甚白し。世にたくひなし。人挙て婚姻を望めども嫁せず、花鳥使日々に到る。此事を厭ひ自ら除髮して尼となる。其より国々を巡行し、靈仏靈社を拝し、或は破壊の社有は是を修造し、或は仏を再興し、道路あしき処には橋をかけ、水なきところには水をさぐり、木なき処には木を植ゑ、其基跡甚多し。世に若狭の白びくにといへり。何の名といふ事をしらず。ここに後瀬山つづき、南西の翠微に、天照皇大神・豊受皇大神の社有。尼此処に柴の庵を結び、朝夕に齋齋しに日く、此間幾百年といふ事をしらず。長生の人と聞及ぶに任尋来拜するも多し。年いくつとへば文武天皇の御時生しと答ふ。容貌を見れば二十斗に見ゆ。長生の道をとへば、七情をはなれ、人のまじはりをやめといふ。其後吾影のこし、何国に死去といふ事をしらず。或説にいふ。小浜町の橋にてころびしゆへに、いまに薨橋といふ。別此橋の石、丹波の国より自負来といふ。其石城中に有之也。其日又武田の城中の岩穴に死すと。人□□りて尋ぬるに尼を見るものなし。此岩穴小浜空印寺に有之。然者天上すか地に行か今に存在するの委曲がたく、世に八百比丘尼といふは、去りし時分と生まれし時分とを考えて八百年余になれば、八百比丘尼といふも、家に伝る処、あらあら是ををし、己下寿命神にて都鄙遠近之人々今に歩をはこぶ事細々たり。

表2. 空印寺関係各地八百比丘尼伝承

番号	伝承地	伝承内容	資料
1	群馬県利根郡 みなかみ町小川	庚申講で竜宮の人魚をご馳走を出され誰も食べず、持ち帰った清治の三歳の娘がこれを食べ、長寿となったが、家族知人に先立たれ、無情を感じて尼になる。それから諸国を遍歴して若狭の国空印寺にて終わる。小川村に八百比丘尼の屋敷があり、石の小祠には八百比丘尼出生の地元文五庚申三月吉日の十九字が彫ってある。この場所を所有する鈴木氏が子孫とされる。若狭空印寺に八百姫神社の碑があり、その文には八百比丘尼の故国として上毛利根郡小川本邸産而農民清治者女也と記されている。	利根郡誌
2	埼玉県八潮市 中馬場	上総から魚の行商にきている老人の招きで名主と村人で老人宅を行くと、人魚がご馳走として出てくる。名主が持ち帰った人魚を孫娘が食べ、長寿となるが、尼となって若狭に行き、八百歳まで生きる。山王塚に比丘尼の安永八年の墓石があるが、八百比丘尼を供養したものの。	八潮の民俗資料 1
3	千葉県松戸市 上本郷	六軒新田の六人が上本郷の長者屋敷の庚申講に呼ばれ、人魚の肉をもらったが、一人持ち帰った者の娘がこれを食べ八百年も長生きする。比丘尼となって若狭に住んだ。千駄堀の人が旅に出たときに、この比丘尼に会った。	松戸の歴史案内
4	千葉県八日市 市場市小泉	昔、八百姫という娘がいて、その父が日頃信仰している龍神から竜宮城に招かれ、人魚の肉をもらい、庚申講で村人と食べる。庚申講で肉を食べると龍神の祟りで村が死に絶えると言われていたので、八百姫は龍神に詫言て尼になる。後に若狭の國に行き、八百比丘尼となる。	房総の伝説
5	新潟県糸川市 市谷根	下早川村中谷根に女中をしている娘がいて、竜宮に招かれた主人の持ち帰った人魚の肉を食べ長寿となる。比丘尼になって諸国を巡り、若狭にて八百歳で死ぬ。若狭には「越後国布川在早川者」と記した八百比丘尼の石碑があるという。	西頸城郡の伝説
6	新潟県長岡市 野積	弥彦明神が野積浜にいた頃、高津家（金五郎）が招かれ人魚をご馳走されるが食べずに家に持ち帰ったところ、娘が食べて八百歳の長寿を保つ。比丘尼になり、天文年代に若狭小浜の空印寺境内で入定した。高津家には尼の遺物の古絵図がある。また家の前には手植えの松があり、この松が生きている限り自分も生きていけると言い残して旅に出た。	『寺泊の歴史』 [伝説の越後と佐渡] 『弥彦山周辺史蹟と伝説』
7	〃	野積村字岩の脇、漁家高津某家に生まれ、麗色仙姿、年を経るも齢尙かず。後剃髮して諸国の霊場を参拝、終わりに若狭小浜の空印寺の境内に草庵を結び百年生じて故に八百比丘尼と名づく。諸侯に召され往事を語るに其説確然たり。尼は天然に死す能わざるを悟り、元文年中（一七三六）同寺の境内に入定す。彼の生家は通称金五郎と唱え、今なお連綿相続し、尼の遺物なりとて古絵図一葉を保存す。	『温故の葉』 第 18 編
8	新潟県佐渡市 羽茂大石	羽茂大石の田屋家の主が、神明講で知り合った老人宅に招かれ、人魚の肉を持ち帰る。それを食べた娘が長寿となり、比丘尼になって全国を行脚する。何百年か後、故郷に帰ってきた比丘尼が村の昔の歴史（肅慎の腹）を語った。再び旅に出た比丘尼は小浜空印寺で入定する。	古志路第 209 号 佐渡の昔のはなし 伝承文藝第 18 号
9	〃	昔大石ノ里ニ八百比丘尼ト云フ者アリ其ノ幼カリシ時其家ニ數人會飲シタル中ニ知ラズ者一人アリ其人云フ我家ニモ筵ヲ開カシ某日某所ニ来レ我レ迎ヘント約シテ別レ期日其所ニ集リテ待チシニ其人来リ迎ヘテ目ヲ閉チメテ導キテ一着ク乃チ目ヲ開ケテ一大屋ニシテ裝飾整備セリ皆驚嘆ス妻罷テ將ニ歸ラントス其人異看ヲ調ヘテ之ヲ出ス衆之ヲ怪ミ皆海ニ投シテ去ル獨リ女ノ父尼辭シ覺エテ携ヘテ家ニ歸レリ女之ヲ喜ヒ食フ是レ即チ人魚ナリ之レカ爲ニ其女年數百歳ニ至ルモ容顏衰ヘス後世ヲ厭ヒニトナリ若狭國ニ往キ住ム事又幾百年ニシテ再ヒ大石ノ里ニ歸リシニ村民皆之レヲ怪ムニ云フ余ハ元此ノ里ノ人ナリ余カ若カリシ時此ノ浦ノ神邪鬼ヲ罪シ殺シテ埋メタル所アリ肅慎限ト云フ彼處ノ大石ノ下是ナリト掘リテ見レハ巨人ノ骸骨出テ、人驚異シタリ尼復タ若狭ニ往キ國守ニ二百歳ノ壽ヲ讓リ八百歳ニシテ歿セリ守之ヲ憐ミ祠ヲ建テ之ヲ祭り八百姫明神ト號ス 当社合殿傳説	佐渡国誌
10	〃	一 神領ニ大木老松アリ。是ハ八百比丘尼妙道直植二代目之松ト言フ。妙道之遺言此松枯タル時ハ我死タリト思ヘシト傳フ。是故ニ付今ニ諸人八百比丘尼ト言フ是也。 一 比丘尼妙道ハ河國之産、何年間之生年共不知、往年藤井甚太郎二仮住居諸國ヲ遍曆シ、佐渡江岸住之時甚太郎六代之産ニ対面スト傳説アリ。此故ニ、是ヲ郷里之人今ニ八百比丘ト唱フ。 一 前記八百比丘尼代々藤井甚太郎二住シアリシガ、往年其終ル所ヲ不知ト傳之。 一 俗説ニ曰ク、熊野神社之開基本願ハ必ス八百比丘尼、宮殿建立ハ飛弾内匠ニ相違ナキノ事ト古老之傳聞説アリ云々。	『熊野神社旧記取調書』 「当社合殿傳説」
11	富山県黒部市 園家	善称寺の裏の池は竜宮に通じるとされ、寺に来た客の接待をした上清どんの爺さんが、人魚の肉が入った折り詰めを持ち帰ったところ、これを食べたお婆さんが長生きをした。園家千軒に大津波が来た際、このお婆さんが警告したが、町の者は信じず、町は全滅し、一人生き残ったお虎婆さんは旅に出て、若狭で八百歳まで生きる。村の人が若狭に訪れた際に、村の椿の花が落ちたときは自分が死んだと思ってくれと言います。末裔が園家の山竜潭といいい村では上清どんと呼んでいる。	越中志微 とやま民俗 20
12	富山県中新川 郡立山町山下	四郎兵衛が講で行った家から、人魚の肉のに入った折り詰めを持ち帰り、娘が食べ何百年も生きただため、白比丘尼と呼ばれる。村から旅立つときに白山社に一本杉を植えた。白比丘尼は若狭で八百比丘尼となったと言われる。	五百石地方郷土史要
13	石川県輪島市 縄又町	谷左衛門が貉の頼母子講に行き、海人魚や海人貝をお土産にもらい、娘が食べ不老不死となる。一度村を出て再び帰ってきたときには知る人もいず、尼となり白比丘尼と呼ばれる。全国を行脚して植樹を行い、一度故郷に戻るが最後には若狭小浜で洞穴に入り、入定した。洞穴に入るときに、椿を植え、これが枯れたら自分が死んだと思ってくれと言います。八百年生きたので八百比丘尼と呼ばれる。八百比丘尼が村を出るとき秀の木は切るなどと言いつつ、村人が言いつけを守らず切ってしまったために縄又は地滑りがひどくなった。八百比丘尼は金の鶏を飼っていたとも言う。	能登志微 輪島の民話 1

14	石川県珠洲市上戸町寺社 光照寺	若狭の八百比丘尼が植えた杉は一本杉と呼ばれている。杉箸から根付いたので、逆さ杉とも呼ばれる。光照寺はもと談議所と呼ばれ、談議兵右衛門の娘が白比丘尼と言われる。	能登名跡志 老の路種 3 能登遊記 下 加賀能登の伝説
15	岐阜県各務原市三柿野	三柿野にアサキ長者がいたが、娘を残して皆死没し、毎日池の魚に飯粒を施したため、功德により八百歳の長寿を授かった。後年、若狭にて没す。	美濃国稲葉郡志
16	岐阜県羽島郡岐南町印食	与四郎という漁師が竜宮城から人魚の肉を買い、それを娘が食べ長生きとなる。大洪水から一人助かり、若狭で比丘尼として暮らす。	尾濃葉栗見聞集
17	愛知県一宮市浅井町尾閨	小塞神社は別名船着明神ともいい、黒岩の某氏が若狭の八百比丘尼に参詣した折、八百比丘尼が尾張愛知県尾閨清山の出身で、清山尼が本名。昔は若狭から尾閨に船が着けたが、百年に一里づつ埋まって、今では宮のボタという所に船が着くと話を聞いた。尾閨神社祭文殿付近で足踏みするとドンドンと音がし、八百比丘尼の生きていた当時の船が埋まっているという。江戸時代に八百媛明神の祠があり、産湯の井戸は若狭空印寺の井戸と奈良二月堂若狭井と三者通じている。	愛知伝説集 一宮市浅井町史
18	愛知県一宮市浜町	八百比丘尼は神明津町豊島某家に生まれたが、故あって人魚を食い、百歳になっても老いないので剃髮して金光寺を創建し、諸国を遍歴して若狭で没した。	愛知伝説集 一宮市史下
19	京都府京丹後市乗原	大久保氏の娘が人魚の肉を食べ八百歳まで生き八百比丘尼と呼ばれる。街道に石を敷いて松の木を植えたので庚申塚に祀られて徳をたたえた。	竹野郡誌
20	和歌山県紀の川市貴志川町丸栖	丸栖村に高橋某という家があり、異人に庚申講の招待を受け、土産として人魚を買ってきたところ、娘が食べて長命となる。数百年後に若狭の尼寺に居住し、入定した。	紀伊統風土記 貴志の谷昔話集
21	島根県江津市都野津町	唐鐘の料理人が、魚の屑を海に捨てていると、亀に導かれて竜宮城でもてなしを受けた。帰る際に人魚の肉を誤って持って帰る、娘が食べてしまい千年の寿命を保ったため千年比丘尼と呼ばれた。若狭で入定したが、線香を持って穴に入り、線香の煙が出ているうちは生きていると言い残す。都野津に来た際に朝日さし、夕日のあたるところに黄金千両のものが埋められているとも言ったとも伝えられる。	江津のむかしの はなし

表 3. 神明宮関係各地伝承一覧

番号	伝承地	伝承内容	資料
1	福島県喜多方市塩川町金川金川寺	昔、若狭小浜より老比丘尼が来て、金川寺を建立した。阿弥陀を自ら彫り、本尊とし、八百歳まで生きた。それ八百比丘尼といった。俗説によれば、八百比丘尼は泰勝道の娘であり、会津山麓にて養老二年生まれ。勝道が庚申講を行った際に、鶴淵野底より龍神が出て人々をもてなして、九穴の貝を出したところ、誰も食べず、勝道が持ち帰ったところ、娘が食べたために長寿を得た。	新編会津風土記
2	福島県会津若松市河東町堂島	八百比丘尼は、会津山麓生まれ。九穴の貝食べたために長寿を得た。金川寺を建立した。	河東村民俗知識通過儀礼口頭伝承
3	栃木県上都賀郡西方町真名子	真名子村里地寺縁起によると八百比丘尼は崇神天皇五十九年に旭の長者の家に生まれた。父が庚申講で持ち帰った貝肉を食べ八百年生きた。八百美久という。天平宝字年間に若狭小浜で死去と伝わる。	若狭国志伴信友書入
4	埼玉県さいたま市西区水判土慈眼寺	地藏堂の黄金仏は八百比丘尼の守護仏で、寿地蔵という。一時期紛失したが、享保年間土中より発見され、その石櫃に八百比丘尼大化元年と記されていた。また榎を植樹した。	新編武蔵国風土記稿 諸国里人談
5	埼玉県さいたま市大宮区宮町八百姫大明神	八百比丘尼（八百姫大明神）が居住した。	大宮市史第五卷
6	埼玉県さいたま市北区植竹町八百姫大明神	昔、八百比丘尼が植えたビャクニンマツと称する松があった。	大宮市史第五卷
7	埼玉県さいたま市北区櫛引町観音堂	二つの塚が八百比丘尼の遺跡として伝わる。根の大木二株も八百比丘尼が植えたと言われる。	新編武蔵国風土記稿 大宮市史第五卷
8	埼玉県さいたま市見沼区染谷	安養寺は、八百比丘尼安養の場所。	大宮市史第五卷
9	埼玉県川口市前野宿 比丘尼堂	比丘尼堂に八百比丘尼が住んでいた。	埼玉県伝説集成
10	埼玉県蕨市錦町	東光寺に八百比丘尼が住んでいた。榿を植樹した。	埼玉県伝説集成
11	東京都北区赤羽北 阿弥陀堂	行基作の阿弥陀は若狭八百比丘尼の看板仏と伝えられる。比丘尼の植えた古い松があった。	新編武蔵国風土記稿 北区史
12	東京都荒川区西日暮里 浄光寺	浄光寺には八百比丘尼が与えたという千手観音がある。	新修荒川区史
13	東京都青梅市塩船 塩船寺	永仁四年に八百比丘尼が立てたという古碑がある。	新編武蔵国風土記稿
14	愛知県春日井市白山町	円福寺の裏山の洞穴のそばの木像は八百比丘尼である。この辺で漁師が人魚を捕り、庚申様のお祭りのお供えにしたところ、一人の娘が人魚の肉を一切れ食ったため、八百歳まで生きた。最後は自ら横穴に入定した。この洞窟は若狭の国まで通じている。	春日井のむかし話